写真①
冬枯れによって８割程度の裸地が出来てしまった草地

写真②
播種ムラ等よって６割程度の裸地が出来てしまった草地

対策事例１：写真①の場合

播種前に手持ちのハローを利用して、土を露出させてから播種・鎮圧作業を行う。覆土が確実にできれば、発芽や初期生育も良く、草地も綺麗に仕上がります。

対策事例２：写真②の場合

表層が柔らかい場合は、グラスシーダーやブロードキャスターで播種し、その後鎮圧します。この時に牧草種子がしっかりと覆土出来ているかがポイントになります。覆土されていないと、その後の発芽不良や生育不良の原因となり、旱魃の影響も受けやすくなります。鎮圧だけで覆土が出来ない場合は、対策事例１を参考にして下さい。

春播種は、４月下旬までに終わらせましょう

専用播種機による追播

播種後一ヵ月目の状況

写真③

追播ポイント：写真③の場合

➡ 播種時期は、早春および８月下旬以降の土壌水分が豊富な時期が最適です。

●掃除刈り：収穫直後であれば必要ないですが、既存草が伸びていれば追播前に短く刈り取る必要があります。
●播 種 量：20～25kg/ha
●利用草種および混播播種量の目安：各草種の混播割合は最寄りの営業所へお問合せ下さい。
（例）オーチャードグラス（バッカス）10～15kg/ha、フェストロリュウム（バーフェスト）５～７kg/ha
アルファルファ（ケレス）３～５kg/ha、シロクローバ（ルナメイ）１～３kg/ha
●播種作業：デスクハローで土を露出後、播種・鎮圧する。または、専用播種機（ハーバーマット・シードマチックetc.）を利用する。
●専用播種機を利用した場合は、作業スピードは６km/h程度とし、鎮圧作業は行いません。

追播時の施肥は避ける

➡ 追播時の施肥は中止し、追播後一か月程度してから発芽した牧草の生育が緩慢な場合は、硫安を10アール当たり10kg程度散布して下さい。また、尿やスラリーがある場合は、利用しても問題ありません。利用にあたっては、下記の注意事項を参考にして下さい。

追播当年の堆肥散布は避ける

➡ 専用播種機を利用した播種後の堆肥散布は追播牧草の生育の妨げとなり、裸地の原因になりますので止めましょう。しかし、尿やスラリーなど液状のものであれば、その限りではありません。
➡ 尿やスラリーを散布する場合は、播種後一か月以上経過した後で、散布量は10アール当たり１～２ｔ程度とします。散布作業は、草地が乾いている時に行って下さい。雨上がりや散布した直後に再度侵入すると、タイヤの跡が枯死する恐れがありますので注意が必要です。

草地更新および追播をご希望のお客様は、最寄りの営業所へご連絡下さい。
専用播種機のご相談も承っておりますので、お気軽にご相談下さい！